

次の文章は、暉峻淑子著『豊かさとは何か』からの抜粋です。文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

問題 1. 著者の考える「豊かさ感」とはどのようなことか、200字以内で述べなさい。

問題 2. 文中下線部について、調和にそぐわないことの具体的な例を1つあげ、調和して生きるとはどのようなことか、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

二つの自然を統一して生きる

人間は、もちろん、物質的な、ある基本が満たされていなければ、飢えや凍えのもとでは、豊かだとはいえない。

しかし、豊富とか豊饒という言葉は、生態学者が言うように、もともと生物にとって、地球的な豊かさ、つまり、なるべく多くの種が共存していること、を意味していた。多くの種が共存しているほど、それぞれの個体もまた、豊かな生き方を保障されているのが、大自然の原理原則だからである。人間の個性を大切に、とか、弱者もともに生きる、ということは、人間もまた自然の一部である限り、地球的な豊かさからみれば当然のことなのである。

木の葉が落ちてバクテリアに分解され、土壌を豊かにするように、小鳥が木の実を食べたり、土中に蓄えたりすることによって、結果的に植林しているように、多くの種は、依存しあいながら生きている。人間もまた、相互に依存しあい、連帯しあいながら、社会の中に根を下ろし、労働や対人関係や自然との交流の中から、養分を吸収し、自分自身も社会にいくばくかのものを還元して、植物のように生の循環をくり返す。その循環の環は、いくつもの他者の循環の環とからみ合い連帯しあうことによって、豊かなのである。

企業の歯車のひとつになりきって、全人生を会社に捧げたり、家に帰りついたら、寝るだけでは、自分自身の全体としての人生はない。カネというひとつの価値だけに支配されることも豊かではない。

もともと、生きる、とは生命力の全体的な発揮であり、偏った部分的な人生は豊かな人生とはいえないのである。私たちは食物、暖かさ、眠り、愛し愛されること、

社会からはじき出されないこと、教育、信念、文化的活動、政治参加などのすべてに対する欲求を持つ者として、全体として生きるのである。それが自己実現である。

また私たちは、雄大な山を見たり、森の中を歩いたり、太陽の輝きが雨上がりの樹々にきらめくのを見たりしたとき、また、一本の草や花、風のそよぎ、水の音、虫や鳥に出会ったときにも、心をひかれ、美しさや感動を覚えて立ちどまることがある。自然の中にいると、何ともいえない気持ちになり、永遠の自然や、命のふしぎさに、神秘的な何かをかんじたりもする。人生の挫折の中で、自然にふれて立ち直るきっかけをつかんだりするのも、人間そのものが自然的存在であるからだろう。

私たちは、近代文明にまきこまれないで自然を友として生きている民族に豊かさや羨望をかんじたりもする。それは、私たちの中にある自然と、外界の自然が、お互いに交流し、呼び合うからだろう。

比喩的な表現であるが、人間は、外の自然と共通で、外の自然と交流しあう、情緒的で、感覚的な、あるいは食欲や性欲という生命力の表現をはじめとする身体的な、いわゆる「第一の自然」とよばれるものと、科学、技術、生産などにかかわる「第二の自然」とよばれる二つの自然を持っており、その交錯、調和、統一によって生きている。

だから、人間が、自分を全体として生きるとは、第一の自然と、第二の自然を統一して、他者との共存の中で生きを意味しており、それが豊かさ感、という充実した幸せ感をもたらすのだと考えられる。経済価値にのみつつ走るとは、人間の二つの自然の調和にそぐわないことではないだろうか。

日本には、アメニティという言葉の正確な訳語がないといわれるが、アメニティとは、あるべきところに、あるべきものがある、ということだという。つまり、それは、第一の自然と第二の自然が、統一され、敵対的でなく、共存をひろげていくことを意味する言葉であろう。そして日本では、技術や生産力の価値があまりに支配的になってしまっているため、「あるべきもの」も「あるべきところ」も、わからなくなっているのであろう。

二つの自然の統一、調和というとき、注意しておかなければならないことがある。科学とか、技術とか、生産などの、いわゆる第二の自然にかかわる言語表現は、数字や法則を含めて、多様で正確な表現形式を持っていると思われる。金銭については最も簡明である。ところが、あの山はすばらしい、とか、この絵や音楽はいい、という感覚的な、第一の自然にかんしては、私たちは、ほとんど数字や法則のような客観的な表現を持っていない。「悲しい」という一言の背後には、おそらくいろいろなものがあるのだが、悲しみが深くなればなるほど、それは「悲しい」としか

言いようがなく、人びとは、それを、体験的に悟るか、あるいは感覚的・身体的なものによって、相互に了解しあうことができるにすぎない。

感覚や感情を正確に客観的に表現するのが難しいだけでなく、人間には無意識の領域さえあるのだという。

私がここで問題にしたいのは、人間というものは（あるいは自然というものは）、まだ知られていない多くのものを持っている未知の存在で、ただモノとカネがあれば幸せだ、ときめつけられるほど単純なものではない、ということである。つまり、豊かな社会の実現は、モノの方から決められるのではなく、人間の方から決められなければならないということである。

客観的な表現はできないけれども、この第一の自然、感覚や感情や身体という、私たちの生を支えているものにも正当な座席を与えなければ、本当の豊かさ感は得られないのではないだろうか。

ここで誤解をさけるために言えば、この感覚の世界は一人一人に完全に個別的なものではない。また、捉えにくいもの、証明できないものは、存在しない、ということでもない。むしろ、あまりにも自明なことのために、ことさらに説明する必要がないのだと思われる。

だからこそ、カネや、政治家の演説ではごまかされないものとして、この人間の、共通の感受性の世界がある。この世界にも豊かさ感をかんじさせるような技術、生産、社会のありかたこそが、本当の豊かさではないだろうか。それは地球的な豊かさと共通する豊かさである。そしてその豊かさは、体験の中でしか感じ表現することができないからこそ、人間は、豊かな全人間的体験を体験できるような余暇——つまり自由時間を必要とする。

暉峻淑子著『豊かさとは何か』（岩波新書、1989）、234～238頁より抜粋